

農業支援♡共に育つ

障害者が活躍「農福連携」

農業を障害者の働く場として活用する「農福連携」が各地で広がりつつある。後継者のいない農家は全国で7割を超え、耕作放棄地は富山県の面積とほぼ同じ約4200平方*に及ぶ。一方、授産施設で働く障害者の賃金(工賃)は、平均で月額1万5千円程度だ。担い手不足に悩む農業と、低賃金に悩む福祉。両サイドがタッグを組み課題を乗り越えようとする現場を訪れた。

加工販売し 高収益化

花の木農場(鹿児島県南大隅町)

野菜宅配で 地域貢献

ごきげんファーム(茨城県つくば市)



養豚小屋で餌を与える男性—2018年10月17日、鹿児島県南大隅町



農場で行われる野菜の選別作業—2018年11月1日、茨城県つくば市



ニンク畑で土を手にする男性—2018年10月17日、鹿児島県南大隅町

九州本土の最南端、鹿児島県南大隅町。県内で最も高齢化が進む人口7千人余りの静かな町に、知的障害者らが働く「花の木農場」はある。深緑が一面に広がる茶畑。迫勇則さん(54)は2畝四方ほどの摘採機に乗り込み、器用なハンドルさばきで新芽を刈り取っている。

大型機械も正確操作

かつて「障害者に機械は扱えない」と言われたが、職員の高保豊和さん(56)は「習得まで時間はかかっても仕事は丁寧で正確」と大鼓判を押す。機械から降りた迫さんは「疲れるけど、おいしいお茶ができるからね」とはにかんだ。1973年創立の社会福祉法人「白鳩会」は、入通所施設を運営する一方で、農事組合法人を立ち上げ、利用者の就農にも取り組んできた。現在では100人ほどが東京ドームの10倍の敷地で働き、食品加工やカフェも手掛ける。午前8時すぎ、養豚班の仕事が始まった。いななきが響く中、慣れた手つきで小屋を清掃、餌を与える。読み書きが苦手な人もいるため、餌ごとに違う色の札を付けるなど工夫を施している。手押し車で作業する長谷昌幸さん(37)

茨城県つくば市の「ごきげんファーム」では、家庭向け有機野菜セットの生産に精神障害者らが励む。伊藤文弥代表(30)は「地域に必要とされる存在に」と力を込める。利用者から正職員に農場は2011年設立のNPO法人「つくばアグリチャレンジ」が運営する。筑波大生だった伊藤代表は、地元市議のインターンシップに参加する中で、耕作放棄地の増加と障害者の働く場所の確保という二つの課題に直面。解決



収穫祭の参加者らと「つくばアグリチャレンジ」の伊藤文弥代表(中央)—2018年11月10日、茨城県つくば市

法を探った結果、就職活動はせずに法人を立ち上げた。農家から借りた農地で年約100種の野菜を栽培。約350世帯に7〜8種の詰め合わせを定期宅配する。就労支援サービスには100人ほどが登録し、農作業や袋詰め、レストランでの調理といった仕事に当たっている。その一人だった益子考生さん(36)。以前は入院するなど不安定な生活だったが、農業の楽しさに目覚め、ついには正規の職員として採用された。「野菜が自分の子のように感じる」とはにかんだ。

「自然の中で働けるのは楽しい」と汗をぬべった。1人暮らしを目標に「企業の工賃はおかげ程度。それなら自分でやろうと考えた」。中村隆重理事長(79)は当時をそう振り返る。周囲からは「金儲けの搾取だ」の声ばかり。売れる農産物を見極め、加工や販売も行う6次産業化で利益を確保。利用者に還元し、批判をはねのけた。平均の月額工賃は、全国平均を5千円ほど上回る約2万円。雇用契約のある場合は9万円を超える人もいる。もらったお金はゲームや手芸用品など趣味に使う人が多い。ニンク畑の牟禮雄斗さん(20)の目標は自立して1人暮らしすること。「貯金して車を買いたい」と目を輝かせる。障害の有無にかかわらず互いに学び合い、働く。白鳩会では「共汗共育」と名付け、実践を重ねた。農業は作業工程が多く、個人の特性に合わせた仕事を見つけれられる。「健常者以上に能力を発揮する人も出てきた」と目を細める中村理事長。次なる夢は、農福の観光農園として多くの人に訪れてもらうことだ。

に感じる」と魅力を語り、「仲間と一緒に仕事できるのがいい」とほほえんだ。住民との接点増やす 11月中旬に開かれた収穫祭。家族連れなど約300人が訪れ、取れた野菜の鍋や天ぷらを頬張った。野菜の宅配を利用する福田咲子さん(37)は「味が濃くておいしいし、働く姿が見えるのもいい」と話す。会場にはファームの卒業生の姿もあった。脳梗塞で車いす生活となった大河原康代さん(49)。3年間、選別などに従事したことで「私にもできることがある」と希望が湧いた。後遺症でこぼばっていた指も動くようになり、現在はパソコンを扱う事務職として働く。ファームで一番大切にしていることは「地域との関係づくり」。地元イベントへの参加や、低料金の体験農園を提供することなどで接点を増やしてきた。「障害のある人が地域で当たり前に暮らし、働けるようにしたい」と伊藤代表。収穫祭で住民から声を掛けられるたび、その手応えを感じていた。